

サラリーマン

復刻版 サラリーマン

◎一九二八〜一九三六年

◎全四巻別冊

B5判・上製・クロス装・総九六九〇ページ

本体揃定価 四三万五〇〇〇円＋税…………… 不二出版



一九三〇年代の「経済大衆雑誌」を復刻出版！

財閥や企業を撃ち、国際問題を論じ、「サラリーマンは戦争に行きたくない」と非戦論を謳い、「働く者本位の社会」をめざした本誌は、当時の『文藝春秋』『中央公論』『改造』と比しても遜色のない啓発雑誌である。

サラリーマン

◎復刻にあたって

一九二〇～三〇年代、関東大震災以後の復興事業ブームから一転、昭和金融恐慌・不況を迎え、急速に増大し始めたサラリーマン(俸給生活者)層にとって「受難の時代」「恐怖時代」がやってきた。経営者でもなく、工場労働者でもない「新中間層」と呼ばれた彼らを「知識労働者」あるいはインテリゲンチヤとして自覚させ、啓発する意図をもって創刊されたのが本誌「サラリーマン」である。主宰したのは戦後自由国民社の創立で知られる長谷川国雄で、本誌は、一九二八年、彼が二七歳のとき「実業の世界」記者を辞し創刊したものである。

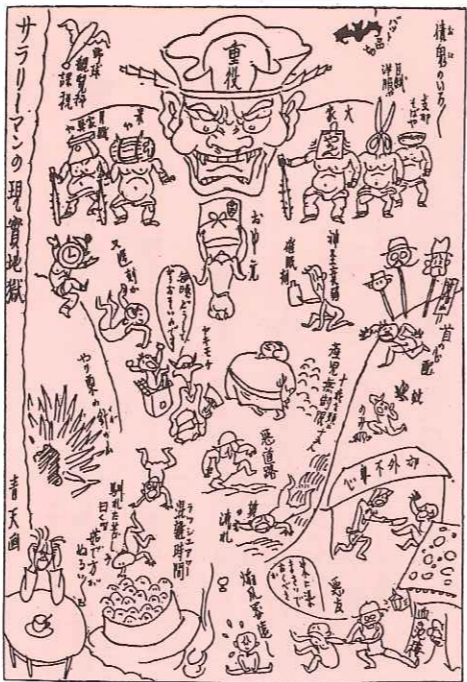
創刊の挨拶では「世紀のインテリゲンチヤたるサラリーマン諸君は何を読む。……差し当って『実業の世界』と『実業の日本』」「東洋経済」と「ダイヤモンド」のエッセンスを若き記者良心が剃刀の如き小雑誌のうちに編輯して、其処に生れ、其処に立つと答へやう」と述べ、この経済雑誌にもない新しさをめざして大宅壮一・青野季吉・高橋亀吉・戸坂潤らのブレインがきわめて斬新な誌面を展開した。初期には財閥・大企業批判、金解禁論争を、後期には五・一五事件や「満州事変」などの政治・国際問題や統制化経済をわかりやすく「大衆的」に論じた。単なる経済雑誌の枠を越え、「働く者本位の社会」をつくるために現制度を打ち破ろうという創刊の意図は最後まで貫かれた。

共産党への関心にも積極的で、それゆえに幾度か発禁の対象ともなったが、とくに柳条湖事件以後、日本政府の植民地政策批判を鮮明にした。「満蒙は国民の生命線といふが、事実にはブルジョアチイの生命線ではないことを、知り抜いてゐるから、戦争に出かけるのが、厭なのである。……その意味に於てサラリーマン大衆は明らかに非戦論だ。……」(一九三一年一月号の社説)本誌はそのため発禁。

一方、執筆陣の範囲は広く、洪沢栄一など超大物の財界人、中島久吉ら現役の財界人、一般紙で活躍するジャーナリスト、杉森孝次郎ら学者のほかに向坂逸郎らいわゆる「労働」系の論客も多数、寄稿している。

三六年七月、コム・アカデミー事件での山田盛太郎・平野義太郎らの検挙に連座して長谷川自身が逮捕され、「サラリーマン」は、別働隊「時局新聞」とともに廃刊される。

「中堅階級の経済雑誌」をもって任じた本誌を復刻し、近代日本史とくに経済史・思想史研究に呈するものである。



◎推せん言葉

天皇制ファシズムへの抵抗

松浦総二(ジャーナリスト)

復刻版「サラリーマン」を喜んで推せんする。

長谷川国雄氏は「忘れえぬ」人物である。四〇数年まえ、私は長谷川氏の下で働き、毎日毎日シゴかれた。どうやら一人前のジャーナリストになれたのは長谷川氏のおかげという外はない。

『サラリーマン』が、あの時代(一九二八～三六年、文春・中公・改造に対して五分五分の闘いをした)のは歴史的事実である。その八年間に、昭和恐慌・満州某重大事件・五・一五事件・滝川事件・番町会事件・天皇機関説事件・陸軍パンフレット事件・日本資本主義論争などがあつた。

長谷川ジャーナリズムは大宅壮一・戸坂潤らのバックアップの下に、これらの事件を解説・批判、抵抗をつづけた。これは一種の壮観であつた。天皇制ファシズムへの抵抗だつた。

長谷川氏は天皇裕仁と同年生まれで、江戸っ子。大正デモクラシーの洗礼をたっぷりうけた歯切れのよいジャーナリストであつた。そういう意味で大宅壮一とは馬があつた。編集者長谷川国雄氏を一口でいえば、企画力の豊富なことであらう。私のジャーナリズム生活六〇年間で彼のような「プラン魔」に接したことがない。

復刻版「サラリーマン」はその生きた見本である。

読者とともに反骨の志を守り抜く

杉原四郎(甲南大学 関西大学 名誉教授)

日本の経済雑誌は、明治以来、日本経済の発展とともに、各階層の読者に迎えられて成長し、大正末にはジャーナリズムのゆるぎない一角を築き上げた。とくに昭和恐慌以降、有為なエコノミストが輩出し、既成の雑誌の地盤にいどんで活発な論戦を展開した。そのことで国策への迎合や投資案内に傾斜する傾向を排して、新しい経済雑誌を国民に提供しようとする傾向が久々によみがえつた。

『サラリーマン』もその一つで、長谷川国雄は志をにかけてわが道をきりひらく意欲に燃えたエディターであつた。当時の経済雑誌には多少とも左翼的論調が見られるが、長谷川は党派的傾向を嫌ってバラエティーのある執筆陣を心かけ、財界・労働界のいづれにもくみしないサラリーマン層に標的をしぼつた。同時に国際動向にも視野を広げて、清新な情報提供につとめ、他誌にない独自のカラーを出すことに腐心した。

日本のアジア侵入が決定的になる時期に、自ら見聞した「満州国」朝鮮の実態やそれを取りまくソ連・中国の動向などをとりあげた誌面には迫力がある。その後強化される当局の取締りにねばりつよく対応しつつ、沈滞してゆく左翼論壇をささえていった「サラリーマン」の苦闘の軌跡は見事である。

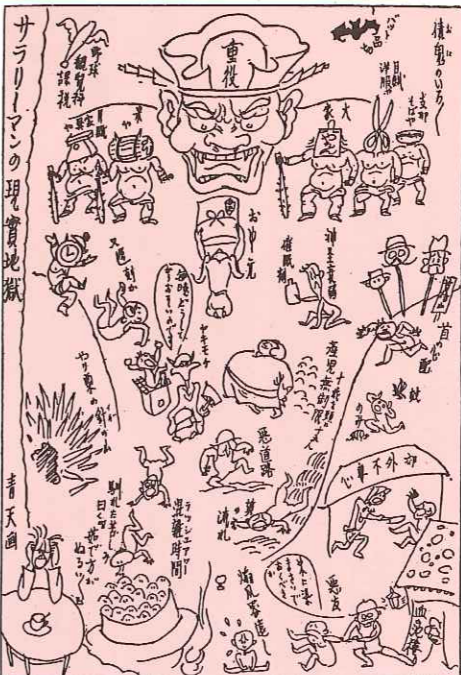
長谷川はこの時期の貴重な体験を、ジャーナリストとして戦後の新しい展開の中に生かしたのである。

「市民」の自立と体制批判の視点を標榜した雑誌

奥平康弘(憲法研究者)

少なくとも政治・社会の分野では、ようやく市民の発言力に重きをおかざるをえない状況が見えはじめた現代日本にあって、いまあらためて「市民」の歴史的な基盤がかんが問われつつある。「市民」——、そんなものは日本にはなかったよと





サラリーマンの現況地獄

◎主要執筆者一覧

青野季吉	大熊信行	窪川いね子	新居格
青柳有美	大下宇陀児	窪川鶴次郎	新渡戸稲造
赤神良讓	大森義太郎	小池四郎	蟻川虎三
赤松克麿	大宅壮一	小岩井浄	野崎竜七
秋田雨雀	大山郁夫	郷誠之助	野呂栄太郎
浅原六朗	岡邦雄	河野密	長谷川国雄
芦田均	小川未明	堺利彦	長谷川時雨
麻生久	翁久允	向坂逸郎	長谷川天溪
安部磯雄	冲野岩三郎	桜井忠温	長谷川如是閑
阿部真之助	尾崎士郎	佐々木孝丸	早坂二郎
阿部知二	尾崎行雄	サトウハチロー	林房雄
荒畑寒村	尾佐竹猛	寒川風骨	福田徳三
生田花世	小野賢一郎	沢沢栄一	藤森成吉
石井柏亭	小汀利得	清水宗兵衛	布施辰治
石川三四郎	恩地孝四郎	下川凹天	帆足理一郎
石橋湛山	片岡鉄兵	下中弥三郎	細田民樹
石山賢吉	片山哲	白柳秀湖	前田河広一郎
伊藤水之介	加藤一夫	鈴木茂三郎	正富洋注
井東憲	加藤勤十	高島米峰	松居松翁
伊藤好道	上泉秀信	高橋龜吉	松本君平
井上準之助	神近市子	武田麟太郎	水野広徳
猪俣津南雄	河崎なつ	田中惣五郎	美濃部亮吉
伊藤部隆輝	菊池寛	谷本富	宮田修
井伏鱒二	北沢新次郎	千葉龍雄	武藤山治
岩波茂雄	北村兼子	津久井龍雄	室伏高信
岩松淳	紀平正美	直木三十五	安成二郎
臼田亜浪	木村毅	永川俊美	山川均
内田良平	木村禮八郎	中島久万吉	山崎今朝弥
生方敏郎	木村莊八	中西伊之助	山田清三郎
江口渙	清沢 洵	長野朗	若宮卯之助
江見水蔭	邦枝完二	中野重治	
大川周明	国枝史郎	中野正剛	
大木篤夫			

THE SALARIED MAN VOL.6 NO.9/30

秋分特刊

1 2 3 4

全新聞社の上で働く者たち
五味子の子書・表
賞本陣・陣防
生活者の戦・ポレ4
五公判判話集

杉原四郎

復刻版『サラリーマン』を喜んで推せんする。長谷川国雄氏は「忘れぬぬ」人物である。四〇数年まえ、私は長谷川氏の下で働き、毎日毎日シゴかれた。どうやら一人前のジャーナリストになったのは長谷川氏のおかげという外はない。『サラリーマン』が、あの時代（一九二八〜三六年）文春・中公改造に対して五分五分の闘いをしたのは歴史的事実である。その八年間に、昭和恐慌・満州某重大事件・五・五事件・滝川事件・番町会事件・天皇機関説事件・陸軍パンフレット事件・日本資本主義論争などがあつた。長谷川ジャーナリズムは大宅壮一・戸坂潤らのバックアップの下に、これらの事件を解説・批判・抵抗をつづけた。これは一種の壮観であつた。天皇制ファシズムへの抵抗だつた。長谷川氏は天皇裕仁と同年生まれで、江戸っ子。大正デモクラシーの洗礼をたっぷりうけた歯切れのよいジャーナリストであつた。そういう意味で大宅壮一とは馬があつた。編集者長谷川国雄氏を一口でいえば、企画力の豊富なことであろう。私のジャーナリズム生活六〇年間で彼のような「プラン魔」に接したことがない。復刻版『サラリーマン』はその生きた見本である。

杉原四郎

読者とともに反骨の志を守り抜く

日本の経済雑誌は、明治以来、日本経済の発展とともに、各階層の読者に迎えられて成長し、大正末にはジャーナリズムのゆるぎない一角を築き上げた。とくに昭和恐慌以降、有為なエコノミストが輩出し、既成の雑誌の地盤にいでんて活発な論戦を展開した。そのことで国策への迎合や投資案内に傾斜する傾向を排して、新しい経済雑誌を国民に提供しようとする傾向が久々によみがえつた。

『サラリーマン』もその一つで、長谷川国雄は志をかがけてわが道をきりひらく意欲に燃えたエディターであつた。当時の経済雑誌には多少とも左翼的論調が見られるが、長谷川は党派の傾向を嫌ってバラエティーのある執筆陣を心がけ、財界・労働界のいずれにもくみしないサラリーマン層に標的をしばつた。同時に国際動向にも視野を広げて清新な情報提供につとめ、他誌にない独自のカラーを出すことに腐心した。日本のアジア侵出が決定的になる時期に、自ら見聞した「満州国」朝鮮の実態やそれととりまくソ連・中国の動向などをとりあげた誌面には迫力がある。その後強化される当局の取締りにねばりつよく対応しつつ、沈滞してゆく左翼論壇をささえていった『サラリーマン』の苦闘の軌跡は見事である。長谷川はこの時期の貴重な体験を、ジャーナリストとして戦後の新しい展開の中に生かしたのである。

「市民」の自立と体制批判の視点を標榜した雑誌

奥平康弘

少なくとも政治・社会の分野では、ようやく市民の発言力に重きをおかざるをえない状況が見えはじめた現代日本にあつて、いまあらためて「市民」の歴史的な基盤いかに問われつつある。「市民」——、そんなものは日本にはなかつたよという答えが返ってくるかもしれない。しかし、「市民」の「自己形成」を標榜するくらいの試みがあつたにちがいない。今回復刻版として登場する『サラリーマン』は、まさにそれを体系的にそして堅実に試みた出版企画である。戦前日本にあつて、なにほどか「市民」の形成を語りうる唯一の時代であつた、一九二〇年代末から三〇年代半ばまでに公刊されたこの月刊誌は、題名が示唆するように経済にやや比重をおきながら、「市民」（中堅・智識階級）の自立を促進しつつ、体制批判の視点を提供することを意図するものであつた。ここで想定されている読者は、概して現今の「市民」の原型であつた、といえるだろう。本誌自体は急進派でもなんでもなく、堅実な情報提供・状況分析をむねとしたものであつたが、日本共産党を典型とする過激な政治運動の取締り事情などを詳しく紹介する記事を載せたりしたというので、内務省警保局の発売頒布禁止処分をいく度か受けている。こうした圧力のゆえ、後半期には自由な紙面作りができなくなつていく。このような権力の爪痕を、こんどの復刻版から十分に見てとれるのもメリットである。私たちにとって身近なレベルに関する、そして現代にとってきわめて重要なつながりのある第一級歴史資料である、と思う。

社畜から脱け出すために

佐高信

いまの日本のサラリーマンを「社畜」と喝破したのは、中堅スーパーのサミット社長、荒井伸也である。安土敏というペンネームを用いて小説も書く荒井は、会社に飼ひ馴らされ、独り立つ気概を失つたサラリーマンを、家畜になぞらえて社畜と称した。この言葉に反発するサラリーマンは多い。しかし、それは痛いところを突かれたゆえの反発ではないのか。私は社畜を、サラリーマンを社畜にする社畜小屋と言っている。この、世界にも稀な、二四時間会社丸抱え制度の社畜をはじめ、サラリーマンの自立への脚力を弱体化するシステムは多い。それは、そもそもどこから始まつたのか。また、どうという意図でそれは始められたのか？

「臭い匂いはモトから断たなきゃダメ」というコマーシャルがあつたが、サラリーマンが社畜になつてしまふ原因を、その根源から断つために、「日本サラリーマン史」の発定期を分析したこの雑誌の復刻は大いなる意味をもつ。

日本近代を照射する幻の雑誌

猪瀬直樹

日本の雑誌文化を考察する際、『サラリーマン』は不可欠である。『文芸春秋』や『中央公論』について論じられても、それらに勝るとも劣らない『サラリーマン』はなぜか忘れられている。歴史の谷間に葬り去られて久しい。いまでこそ、倅給生活者（こと）をサラリーマンとあたりまえに呼ぶが、そもそもこの呼称を普及させたのも『サラリーマン』があつたこと。カタカナの響きがモダンで新鮮で、タイトルそのものが新時代への讃歌、新しい生き方へのメッセージであつた。国文学者が描く文学史がきわめて狭い事象しか触れず、また経済学者が記す経済史が無味乾燥なのは、こうした『サラリーマン』の存在に気づかず、さらにはその購読者の生活に想い及ばないからである。幻の『サラリーマン』がこうして復刻されることにより、「日本の近代」に対する考察が深まることを期待したい。

